

いま

いづみ

ただ

あき

(動物学者)

ゆうゆうインタビュー

七十九歳になる今も自然の中に出かけ、生息する動物の現地調査を行う動物学者の今泉忠明さん。監修をつとめた『ざんねんないきもの事典』シリーズは累計四百八十万部を突破。動物の弱さやユニークさ、けなげさにスポットをあて、二〇一八年の子どもの本総選挙で第一位に選ばれました。二〇二〇年には子ども向けの自然教室「けもの塾」をスタート。子どもの教育への視点はどこから? 父も兄も息子さんも動物学者という今泉家の環境は? 動物の仲間として人間は老年期をどう生きるべきなのか? などなど、お話をうかがいました。



一九四四年東京都生まれ。東京水産大学(現・東京海洋大学)卒業。文部省(現・文部科学省)の国際生物学事業計画調査、環境庁(現・環境省)のイリオモテヤマネコの生態調査、日本列島の自然史科学的総合研究などに参加。上野動物園動物解説員を経てねこの博物館(静岡県伊東市)館長。『アーミットラック&バードトラックハンドブック』『野生ネコの百科』『猛毒動物最恐50』『外来生物最悪50』『巣の大研究』『図解雑学 誰も知らない動物の見かた』『動物行動学入門』『小さき生物たちの大いなる新技術』『危険動物との戦い方マニュアル』『猫はふしき』などの著書、「講談社の動く図鑑MOVE」、『ざんねんないきもの事典』シリーズなどの監修書多数。

いいことを伝え、いい文化をつくる

——『ざんねんないきもの事典』(以下:『ざんねん』)

は幅広い年齢層に読まれ、大人気です。

今泉 おじいちゃんと孫と一緒に読んで、「これ知つてた?」「そうなんだ」「どうしてかな?」と、コミュニケーションが生まれているようです。「頑張らなくてもいい」って本だから、いつも「頑張れ」って言われている子どもたちに受け入れられたんじゃないかな。

——そうですね。今の子どもたちはとても疲れています。

「サーバルは耳がよすぎて、ビュービュービュー風が吹く口は集中できないから狩りをやめてしまうことがある」(続々『ざんねん』)など、ホッとします。

今泉 動物は無理をしません。雨の日は歩くのは人間くらいなもの。『ざんねん』はあくまで人間目線で書かれているから、本当のところ動物は違うつもりでやっているかもしれないけれど、まず興味をもってもらって、だんだんと動物学的な話をしていけたらと思っています。

——「ヒト」は、どういう動物なのでしょう。

今泉 非常に欲が深い。そのおかげで文化が発展したけ

れど、欲を悪いほうにも使っていますね。両方が混在していて、今、若い人はすごく迷っている。欲を道徳や正義心で抑えないと、やっていいこと悪いことのけじめがなくなってしまいます。六千年前までは、欲をいいほうに使っていたんですが。

——六千年来強欲なんですね。

今泉 農業が盛んになって富を蓄えられるようになると、貧富の差が出始めた。その頃から欲が悪いほうに使われるようになってきた。これを抑えられれば「未来を想像する」という人間のよい特性が生かせると思います。

——人間は平和な世界を想像して戦争をやめることができるはずなのに、いまだに武器を持って殺し合いをしていますね。

今泉 思いやりがなくなつたということです。だから年寄りも大事にされなくなつた。昔家族構成のトップが一番経験豊かな年寄りだったのは、知恵があつたからです。いいことを孫に伝えることで、いい文化がつくられた。ところが今はおじいちゃん・おばあちゃんが、「もっと勉強してお金を稼げ」なんて言うもんだから、子どもの価値観が変わっちゃったんですね。少しずつ悪い方向にいって、一気に悪くなっちゃったのが今なんだと思う。

アフリカゾウは、おばあちゃんが群れのリーダーなんですよ。オスは大人になると群れを出ていくから、群れはおばあちゃんと娘と孫で構成されている。おばあちゃんが行くところに行けば必ず水がある。危機が迫つたら修羅場をくぐつた知恵で群れを守る。だから体が衰えても大切にされる。人間もそうあるべきでしそうね。

——気持ちを元気に保たなければいけませんね。

今泉 歳を取ると下がっていくモチベーションを何とか打破しないと。それには自分に合つたりズムと環境を自分でつくって、ストレスなく生きることが大事です。子どもたちの頃夢中になつたことを思い出して、もう一回やってみるといいですよ。ザリガニ釣りとかね。生態や習性を図書館で調べたりして、突き詰めていってザリガニ釣りの名人になる。楽しそうでしょ?

小学生の頃から父について動物の標本作り

——終戦の前年、杉並区阿佐ヶ谷のお生まれです。どんなお子さんでしたか。

今泉 小さい頃はまだ阿佐ヶ谷一帯は焼け野原で、野っぱらと瓦礫のレンガ色が心象風景です。日暮れまで善福寺川でザリガニやカエル、魚採りをして、お腹がすくと

家に帰る。「鉄砲玉」って言わっていました。まさに動物です（笑）。

父と母、兄、弟、妹、父方の祖父母、母方の祖母の九人家族で、何でも一人でやっていたなあ。でも幼稚園に行かなかったので、小学校に上がるときに読み書きができないなかつた。学校は遊ぶところだと思っていたんです。

——勉強に目覚めたのは？

今泉 三年生で兵隊上がりの先生が担任に。この先生、すぐ殴るんですけど、「お前はもうちょっと勉強すれば偉くなる」とも言つてくれた。勉強してみると、漢字でも計算でもやり方を覚えればできるということに気づいた。わかることが面白くなつたんです。勉強嫌いではなかつたんですね。三年生というタイミングもよかったです。人間つて、ちょうどそういう気分のときにいい人には会うと、いい方向に行くんですね。出会いが大事です。出会いも運だと思うけれど、よい人を見極める力は、遊びの経験でつくられるんじゃないかな。いじめやざるをする人を見ていると、感覚的にわかるものです。

——お父様は動物学者。自身も同じ道を進まれたのは環境が影響していますか。

今泉 父は上野の国立科学博物館（以下・科博）に所属

し、哺乳類研究で基礎となるネズミ、モグラ、コウモリを研究していました。家には僕や兄、弟が捕まえてきて飼うようになった動物のほかに、父の研究用の動物もたくさん。家に動物はいて当たり前でした。本棚の本も動物関連のものがほとんどで、それが面白くてこっそり読んでいました。小学校高学年くらいになると宮本武蔵や豊臣秀吉などの歴史ものや、シャーロック・ホームズや怪盗ルパンなどの探偵ものも。中学になるとドイツ文学も読みました。

——文学もたしなんだ少年が、動物学者を志した最初は？

今泉 小学校中学年くらいになると、父は週末、高尾山に僕と兄を動物採集に連れて行きました。罠を仕掛けてネズミやモグラを捕まえ、家に持ち帰つて標本にします。体の計測をしたら解剖して、頭骨と毛皮の標本に。採集と標本の基礎は、小学校の頃全部叩き込まれました。

——「怖い」という気持ちはありませんでしたか。

今泉 中学生になると、気持ち悪いとか血が出るから嫌だという感情が入つてくるんですが、小学生にはそれはなくて、ただただ面白いんです。動物の体の中はどうなっているんだろう？ と興味津々。学習も人ととの出会いとい

同じで、適切な時期があるんですね。

——お父様には、自分と同じ道を歩いてほしいという気持ちがあつたのでしょうか。



(上) 高尾山でネズミをつかまえるための罠を仕掛ける10歳の今泉さん。1954年

(左) 小学校6年生のときお兄様と、高尾山の山頂にて。1956年

——お父様には、自分と同じ道を歩いてほしいという気持ちがあつたのでしょうか。

今泉 あつたでしょうね。だけど父の片腕のように参加していた兄の存在が大きくて、僕は海の生き物を研究しようと思ったんです。楽しそうだなと思つて(笑)。

結局哺乳類の研究者になつてしまつたんですけどね。

海に行くためには体を鍛えなければと、中学は野球部と柔道部、高校は野球部に入りました。成城高校の野球部は部員が九人しかいなくて、

していた兄の存在が大きくて、僕は海の生き物を研究しようと思ったんです。楽ししそうです。なと思つて(笑)。

——強く、柔軟ですね。

今泉 「もつと楽しく生きましょうよ」って気持ちをもつていたんです。それは先生に殴られたりした経験があるからかもしれない。そんなふうに思われては、先生も殴りがいがなかつただろうね(笑)。

一年生から試合に出るので練習が厳しく、家に帰り着くのは夜八時。そのうえ一日五個、練習用ボールを縫うんです。ボールは硬いし疲れて眠いし…大変でした。野球はヘタだつたけど好きだった。ヘタで当たり前です。だって海へ行くためにやつていたんだから(笑)。当時の運動部は殴られるのは当たり前で、「受験のために辞めます」と二年生の夏に宣言したときも殴られたけど、僕は自分で決めたことは絶対変えないから、どうってことはなかつた。

——大学は東京水産大学（現・東京海洋大学）へ。

今泉 現役受験ではほとんど0点。勉強していないんだから無理もない。浪人中は、過去問をひたすら解いて、問い合わせも答えも覚える勉強法で翌年合格しました。入学してすぐに親父から言われたのは、車の免許を取ること。採集旅行へ車で行くために、親父は安いおんぼろの車を買つてきました。

運転して、現地に着いたら、テントを張って飯をつくつて、たくさんの助手の人たちと標本作り。親父から動物の進化や生態学の話が出て、質問したりしながら作業をする。これは勉強になつたし楽しくて、だんだん自分の居場所になつていった。ある学説を廻って違う考え方もあることや、新説が必ずしも正しいわけではないということ；客観的な視点も身についたと思います。「少しでも標本数を増やして研究に役立てたい」と、家でもせつせと標本作りに精を出しました。標本には通し番号をつけるんですが、手伝い始めた頃八〇〇番台だったのが、一二〇〇番までいきました。

——百科事典に載つている動物のサイズや繁殖行動など生態の特徴も、「標本」があつてこそなのですね。

今泉 標本データを積み重ねて、統計的な数値から平均値を出します。その計算法も単純ではなく、統計学も科博時代に勉強しました。標本の数が重要で、博物館のレベルは標本の数で決まるといわれるほど。当時世界随一といわれるロンドンの大英博物館は、哺乳類だけでも數十万点。対して科博は一万数千点でした。

——大学卒業後は？

今泉 どこにも就職しないまま卒業式を迎えるました。

「楽しいことで人のためになれる」と、動物学者への夢がふくらんできたんです。頻繁に科博に通ううちに自由に出入りできるようになり、特別研究生として日本列島総合調査や国際生物学事業計画調査などに参加しました。

女子大の講師の話も来たんですけど、断りました。助手の立場では自分の好きな山には行けないのでね。ちょうどその頃、上野動物園の初代園長の林寿郎さんから「富士山に子どものための自然学校をつくる計画がある。動物の案内をするために、富士山にいる哺乳類を研究してほしい」と声がかかりました。女子大は断つてしまつたし、ほかの調査に行くときはそちらを優先してもいいという願つてもないお話で、お引き受けしました。それが一人研究者人生の始まりです。給料が出たので結婚もしました。一九七〇年、二十六歳のときです。

——日本列島総合調査では、北海道から沖縄まで日本各地を調査。西表島で野生のイリオモテヤマネコの撮影に初めて成功したことは、エポックメークィングですね。

今泉 西表を三年間歩きっぱなしでやつと会えました。——いつ出会えるかもわからない動物を追いかけるときは、どこに着目するのですか？

今泉 まず糞探しです。ネコ科の動物は自分の行動圏の

端っこで排泄するので、それを地図に落として調査地点を決める。ヤマネコなのか野良猫なのか確かめるために、糞が一番多かったところでニワトリを飼ってみると、予定通りニワトリが襲われたので、暗視カメラを仕掛けました。ヤマネコでした。撮ろうと思って撮ったのではなく、調査のために確認のために撮れたということです。

——二ホンカワウソの撮影に成功したのも、調査の一環からですか。

今泉 そうです。カワウソの生息地は、足摺岬がある高知県幡多郡（現・中村市）。そここの「自然を守る会」の人々が、「見たことのない変な動物がいるから調べてほしい」と科博に来たんです。それを聞いた月刊『アニマ』編集部から、調査取材をしてほしいと声がかかり、現地に向かいました。「僕がカワウソだつたらどこに棲むだろうか」と想像すると、やはりきれいな場所ですよね。海岸を延々と歩き、ここぞという場所に暗視カメラを仕掛けました。撮れたのは半年後です。調査の一環で動物の写真を撮るのは面白いし、意味があると実感しました。

——初めて単行本を書かれたのは？

今泉 富士山の哺乳類調査では、No.1から標本番号をつけながらせつせと標本を集めていたんですが、オイルショッ

クで自然学校の計画がつぶれてしまつたんです。すでに巨大な施設ができ上がっていなんんですけど、すべてご破算に。たっぷり時間ができたので、これまでの調査のデータベースづくりをしました。ノート百二十冊くらいになつた頃、『アニマ』の編集長から声をかけられて初めて書いた単行本が『アニマルトラック・ハンドブック—足跡を残した動物たちを知るために』（共著）です。編集長に「今泉君の持つてくる写真は足跡と糞ばかりだね」と言われつつ書きました。足跡を追いかけるのは、『シートン動物記』を読んでシートンがやっていたのを知つていたから。それが役に立つたんです。

——調査してわかつたことを本に記すスタイルの始まりですね。

今泉 論文ではなく単行本で研究発表をする、ジョージ・B・シャラーという世界有数のフィールド生物学者がアメリカについて、その方式で行こう！と思つました。学会に論文を出さなくとも動物学者になれる。論説もできるし収入も得られる。それが今まで続いています。

僕は子どもの頃、「タイトル、自分の名前、感想を一言」の三行作文しか書けなかつたんです。皆が知つていふことを書いてもしようがないと思つてね。でも動物の

ことは違いました。皆が知らないことだからていねいに書こうとするし、不思議と楽しかった。

その頃、北海道でキタキツネの調査をしていた獣医の竹田津実さんが書いた『キタキツネ物語』を読んで、詩情あふれる文章に感銘しました。人に読んでもらうにはこういうふうに書かなくてはと、竹田津さんに会いに行きました。ちょうど子ども向けの夏の自然教室をやっていて、皆でカレーライスを作つて食べていました。裕福でなくとも皆で楽しくやっていた。心のゆとりを感じました。そういう人だからこそ書ける文章なのだと思いました。

——書いて伝えるとき、大切にしてきたことは？

今泉　観たことを正しく書くことです。小説のように空想で書いてはいけない。でも論文ではないから楽しいものにしなくてはならない。そこが難しいところです。自分の気に入つた文章に出会うと、センテンスごと手帳に書くようになりました。自分がけの類語辞典をつくつたりも。同じ「美しい」でも、作家によつていろいろ表現がある。それをまとめたんです。だんだんと自分の言葉ができてきて、自分の文章がきれいになつていくのは楽しいものです。

——アメリカの国立公園の調査、コモド島のコモドオオトカゲの調査など、八〇年代からは海外での調査の仕事も多かつたのですね。印象深いのは？

今泉　インドネシアのボルネオ島にあるセピロック・オラウータン・リハビリテーション・センターの取材です。農地の開拓や農園の建設で森林伐採が進み、棲む場所を失つたオラウータンの孤児を保護し、親の代わりに人間が育てて野生に返すための訓練を行つて、マレーシアは自然保護の水準が非常に高かったです。最初は抱き合つて離れないオラウータンの赤ちゃんが、木登りをしたり自分でベッドメーキングができるようになるまで世話をするシステムがしっかりとできていました。絶滅危惧種を守る活動は、日本では動物園での繁殖か獣医さんの個人的な活動の範疇で、ケアして野生に返すという発想がない。自然保護学の専門家を育てる方向性が必要だと感じました。

失敗から学ぶ経験を大事にしてほしい

——三年前、フィールドワークのための教室「けもの塾」を開設。「まだわからないことがたくさんある自然の中生きる動物について、自分の手と足、五感を使って解

き明かしていくことで、知ることの喜び、自然と動物への思いを深めてほしい」という理念です。

今泉 命の大切さ、人としてよく生きることを伝えるために子どもを教育することは、我々おじいちゃん・おばあちゃんの使命だと思います。せっかく溜めてきた知識ですから、伝えなければ意味がない。そんな考え方で取り組んでいます。

子どもたちと山に入ると、自分勝手にさせます。「何でもいいから拾っておいで」と。そして、取つて来たものと一緒に見てあげる。

「やつてみせ、言つて聞かせて、させてみせ……」

は連合艦隊司令官・山本五十六の名言ですけど、それでこそ子どもはまつとうに育つと思う。失敗から学ぶ経験を大事にしたいと思っています。

——現在の研究テーマは？



富士山の林道わきに暗視カメラを仕掛ける今泉さん

今泉 富士山の下のほうの森で、現地の植物や昆虫、地学の先生たちにご協力いただきながら「いい森・悪い森」を調べています。「いい森」は、哺乳類学的に全部の種類がそろって生態系が多様な森。「悪い森」は、何かが抜けてバランスが悪くなっている。そういう仮説のもとに動物分布の記録を取っています。

——バランスの崩れは自然環境が要因ですか？

今泉 樹木を伐採して森が狭くなり、野生動物が餌を求めて人里に下りてくるようになりました。森と人里とのバッファーゾーン（緩衝帯）の整備も大事ですが、森がしつかりしていれば下りてこないはず。ブナの植樹など各地で取り組みがみられます。百年くらい時間はかかりますけど、悪い森をいい森に戻すことはできます。

——来年八十歳になられます。今後は？

今泉 親父が昔親戚の子どもに「おじさん、まだネズミの研究をしているの？」と聞かれて、「そうだよ。一生やるんだよ」と答えていました。衝撃だったでしょうね（笑）。動物のことはわかっていることがまだ一割程度。知れば知るほど疑問が出てくるし、好奇心がわいてくるから終わらない。楽しみながら仕事を続けていきたいと思います。